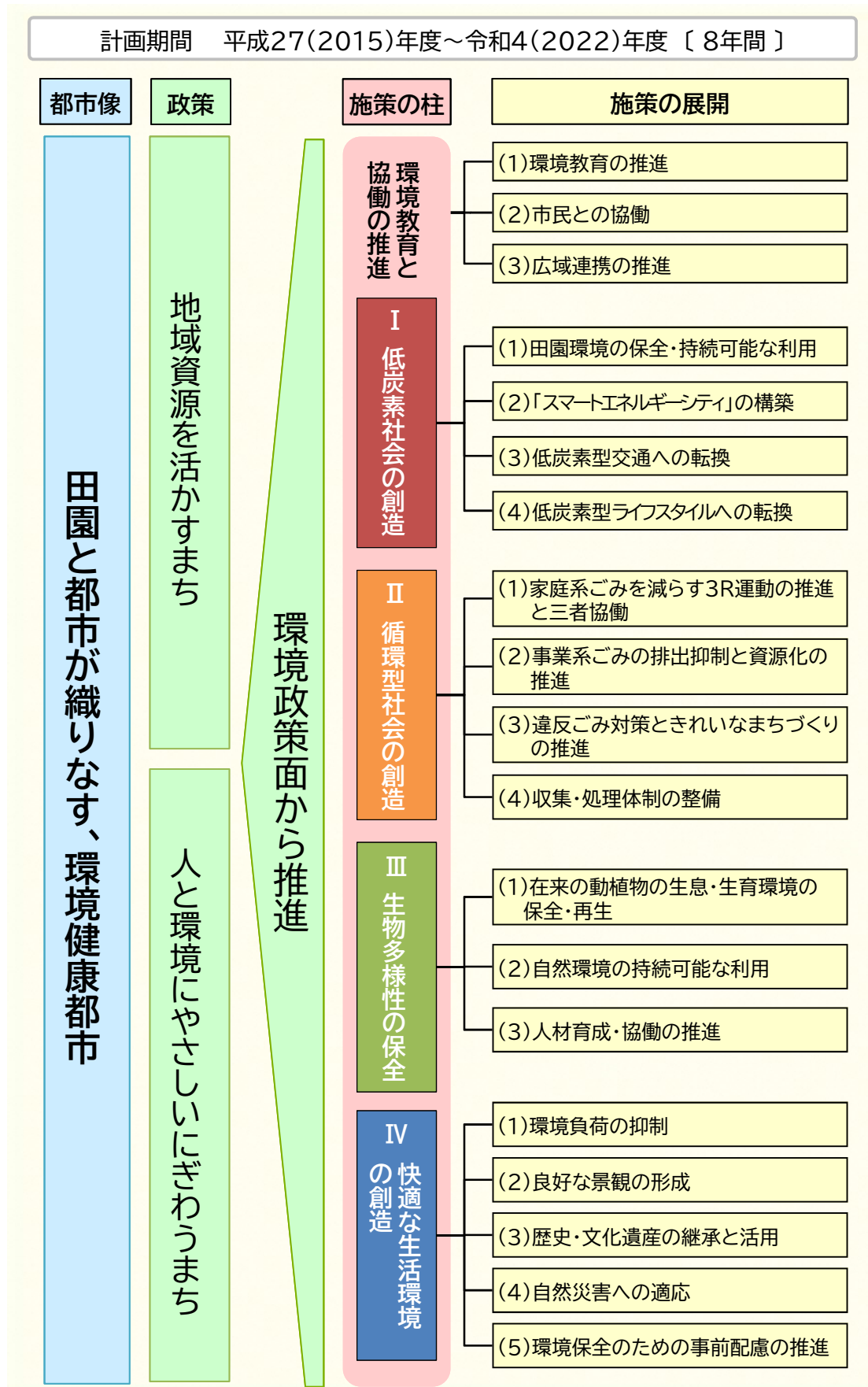


第3次新潟市環境基本計画の評価と課題について

1. 施策の大綱



2. 指標項目の推移

環境教育と協働の推進											
指標項目	基準値 (年度)	実績値 (年度)								目標値	
		H27(2015)	H28(2016)	H29(2017)	H30(2018)	R1(2019)	R2(2020)	R3(2021)	R4(2022)		
低炭素社会の創造、循環型社会の創造、生物多様性の保全、快適な生活環境の創造の各施策に掲げる目標を、当該施策に掲げる指標とする。											
I 低炭素社会の創造											
指標項目 (H27～H30)	基準値 (年度)	実績値 (年度)								目標値	
		H27(2015)	H28(2016)	H29(2017)	H30(2018)	R1(2019)	R2(2020)	R3(2021)	R4(2022)		
市域の温室効果ガス排出量	710万 t-CO2 (2011(H23))	685万	686万	661万	635万	—	—	—	—	624万 t-CO2 (2018(H30))	
★ もみ殻などのバイオマスエネルギーの活用	— (—)	活用を検討	モニター事業 で活用	モニター事業 で活用	民間で活用	—	—	—	—	活用の実現 (—)	
太陽光発電システム導入量(10 k W 未満)	18,000 kW (2013(H25))	18,000	27,700	30,265	33,305	—	—	—	—	36,000 kW (2018(H30))	
自動車利用の削減	— (—)	—	—	2.6%増加	2.6%増加	—	—	—	—	2.5% 削減 (—)	
1世帯あたりの電気使用量(年間)	3,612 kWh (2013(H25))	3,465	3,334	—	—	—	—	—	—	3,160 kWh (2018(H30))	
指標項目 (R1～R4)	基準値 (年度)	実績値 (年度)								目標値	
		H27(2015)	H28(2016)	H29(2017)	H30(2018)	R1(2019)	R2(2020)	R3(2021)	R4(2022)		
1世帯あたりの二酸化炭素排出量	4.2 t-CO2/世帯 (2016(H28))	—	—	—	—	4.5 (H29確定値)	4.2 (H30暫定値)			3.6 t-CO2/世帯 (2024(R6))	
市内1事業所あたりの二酸化炭素排出量	96.2 t-CO2/事業所 (2016(H28))	—	—	—	—	97.4 (H29確定値)	93.3 (H30暫定値)			96.3 t-CO2/事業所 (2024(R6))	
電気自動車(EV)、 プラグインハイブリッド自動車(PHV)、 燃料電池自動車(FCV)台数	(E V) 833 台 (PHV) 671 台 (2018(H30)) (FCV) 2 台	—	—	—	—	(E V) 951 (PHV) 743 (FCV) 10	(E V) 1,040 (PHV) 829 (FCV)24(県内)			(E V) 2,500 台 (PHV) 2,800 台 (2024(R6)) (FCV) 60 台	
★ 区バス・住民バス利用者数	52.1 万人/年度 (2018(H30))	—	—	—	—	51.5	42.2			39.2 万人/年度 (2024(R6))	
II 循環型社会の創造											
指標項目 (H27～H30)	基準値 (年度)	実績値 (年度)								目標値	
		H27(2015)	H28(2016)	H29(2017)	H30(2018)	R1(2019)	R2(2020)	R3(2021)	R4(2022)		
家庭系ごみ量(1人1日あたり)	501 g (2013(H25))	500	488	487	488					474 g (2019(R1))	
事業系ごみ排出量	84,962 t (2013(H25))	78,224	78,399	79,267	79,186					74,500 t (2019(R1))	
リサイクル率	27.2 % (2013(H25))	27.8	27.9	26.7	26.4					30.9 % (2019(R1))	
最終処分量	29,213 t (2013(H25))	22,350	21,712	22,319	24,261					21,800 t (2019(R1))	
指標項目 (R1～R4)	基準値 (年度)	実績値 (年度)								目標値	
		H27(2015)	H28(2016)	H29(2017)	H30(2018)	R1(2019)	R2(2020)	R3(2021)	R4(2022)		
家庭系ごみ量(1人1日あたり)	488 g (2018(H30))	—	—	—	—	492	505			475 g (2022(R4))	
★ 事業系ごみ排出量	79,186 t (2018(H30))	—	—	—	—	78,718	71,161			77,300 t (2022(R4))	
リサイクル率	26.4 % (2018(H30))	—	—	—	—	25.7	26.4			27.1 % (2022(R4))	
ごみ総排出量(1人1日あたり)	1,006 g (2018(H30))	—	—	—	—	1,001	990			987 g (2022(R4))	
III 生物多様性の保全											
指標項目	基準値 (年度)	実績値 (年度)								目標値	
		H27(2015)	H28(2016)	H29(2017)	H30(2018)	R1(2019)	R2(2020)	R3(2021)	R4(2022)		
★ 生物多様性の象徴としてのハクチョウとの共存	日本一の越冬数 (2013(H25))	現状を維持	現状を維持	現状を維持	現状を維持	現状を維持	現状を維持			現状を維持 (2022(R4))	
特定外来生物の種類	10 種 (2013(H25))	11	11	11	12	13	14			現状より減少 (2022(R4))	
環境保全型農業を実施する農地の割合	34.4 % (2013(H25))	35.64	35.91	35.4	30.4	26.44	25.27			50 % (2022(R4))	
IV 快適な生活環境の創造											
指標項目	基準値 (年度)	実績値 (年度)								目標値	
		H27(2015)	H28(2016)	H29(2017)	H30(2018)	R1(2019)	R2(2020)	R3(2021)	R4(2022)		
★ 生活環境における空気のきれいさ 沿道における空気のきれいさ	0.007 ppm (2013(H25)) 0.009 ppm	0.007 0.009	0.006 0.007	0.007 0.009	0.005 0.007	0.005 0.007	0.005 0.007			現状より低減 (2022(R4))	
水がよりきれいなランクになった河川・湖沼の水域数	— (—)	0	0	0	-1	1	0			3 地点 (2022(R4))	
食育・花育センターが実施する花育体験プログラム等の実施団体数	30 団体 (2013(H25))	80	70	78	67	82	51			70 団体 (2022(R4))	
保育所、幼稚園、小学校の地域との連携による花育活動実施率	48 % (2013(H25))	49	47	54	54	54	47			60 % (2022(R4))	
植栽やビオトープづくり等、美しい農村景観の形成を行う農地の割合	78 % (2013(H25))	83.7	84.3	85.7	86	85.7	85.3			90 % (2022(R4))	

3. 主な評価と課題

I 低炭素社会の創造

8年後(令和4(2022)年度)のまちの姿

都市と田園が調和した持続可能な発展に向け、再生可能エネルギーの普及やエネルギーの利用効率化が進み、過度な自動車依存からの脱却やライフスタイルの転換などにより化石燃料の使用が必要最小限なまち

- ▶ 都市と田園が調和した持続可能なまちとして発展しています。
- ▶ 再生可能エネルギーの普及やエネルギーの効率的利用が進んでいます。
- ▶ 徒歩や自転車での移動がしやすく、環境に配慮した交通システムが充実しています。
- ▶ 低炭素型のライフスタイルが定着し、温室効果ガスの排出が少ない社会になっています。

【平成27(2015)～30(2018)年度の評価指標】

指標項目	計画策定時点 (H25 (2013)年度)	目標 (H30 (2018)年度)	実績 (H30 (2018)年度)
市域の温室効果ガス排出量	710万t-CO ₂ /世帯※ _{1,2}	624万t-CO ₂ /世帯※ ₃	635万t-CO ₂ /世帯
★ もみ殻などのバイオマスエネルギーの活用	—	活用の実現	民間で活用
太陽光発電システム導入量(10kW未満)	18,000kW	36,000kW	33,305kW
自動車利用の削減	—	2.5% 削減	2.6%増加
1世帯あたりの電気使用量(年間)	3,612kWh	3,160kWh	—※ ₄

【令和元(2019)～6(2024)年度の評価指標】

指標項目	計画時点 (H30 (2018)年度)	目標 (R6 (2024)年度)	実績 (R2 (2020)年度)
1世帯あたりの二酸化炭素排出量 (家庭部門排出量/世帯数)	4.2t-CO ₂ /世帯※ ₂	3.6t-CO ₂ /世帯	4.2t-CO ₂ /世帯※ ₅
市内1事業所あたりの二酸化炭素排出量 (産業・業務部門排出量/市内事業所数)	96.2t-CO ₂ /事業所※ ₂	96.3t-CO ₂ /事業所	93.3t-CO ₂ /事業所※ ₅
電気自動車(EV)、プラグインハイブリッド(PHV)、 燃料電池自動車(FCV)台数	EV:833台 PHV:671台 FCV:2台	EV:2,500台 PHV:2,800台 FCV:60台	EV:1,040台 PHV:829台 FCV:24台(県内)
★ 区バス・住民バス利用者数	52.1万人/年度	39.2万人/年度	42.2万人/年度

※₁ 平成23(2011)年度数値。

※₂ 算定の基礎となる「都道府県別エネルギー消費推計」の算定方法が平成2(1990)年度まで遡って改定されたため、市地球温暖化対策実行計画策定時点の数値を変更したことに伴い、実績値を修正。R6(2024)年度目標値は、当初計画策定時のもの。今後、計画見直し時に改めて目標値を修正。

※₃ 基準年度(平成17(2005)年度)比15%削減。

※₄ 電力自由化に伴いデータの提供協力が得られなくなったため算定不可。

※₅ 平成30(2018)年度暫定値。

主な評価と課題

- ・市域の温室効果ガス排出量は、基準年度の平成25(2013)年度比では年々減少傾向。
- ・部門別の割合で最も多いのが民生(家庭・業務)部門。家庭部門の世帯当たり排出量は政令市ワースト2位。北陸地方特有の気候条件や、持ち家率の高さと延べ床面積の広さ(いずれも政令市1位)が、未達成の要因として考えられる。
- ・地域における脱炭素化の推進は、環境面だけでなく経済・社会などの地域課題の同時解決に貢献することから、市民や地域の事業者と、あらゆる場面で一体となって取り組むことが必要。

Ⅱ 循環型社会の創造

8年後(令和4(2022)年度)のまちの姿

市民・事業者・市の協働のもと、3R(リデュース(発生抑制)・リユース(再使用)・リサイクル(再生利用))の優先順位で資源が循環利用されるまち

- ▶市民一人ひとりに3Rの意識が浸透し、ごみをできるだけ出さないライフスタイルが定着しています。
- ▶ごみ分別による資源化が進み、その効果が理解されるとともに、分別することがあたりまえのことになっています。

【平成27(2015)～30(2018)年度の評価指標】

指標項目	計画策定時点 (H25(2013)年度)	目標 (R1(2019)年度)	実績 (H30(2018)年度)
家庭系ごみ量(1人1日あたり)※ ₁	501g	474g	488g
事業系ごみ排出量※ ₂	84,962t	74,500t	79,186t
リサイクル率※ ₃	27.2%	30.9%	26.4%
最終処分量※ ₄	29,213t	21,800t	24,261t

【令和元(2019)～4(2022)年度の評価指標】

指標項目	計画時点 (H30(2018)年度)	目標 (R4(2022)年度)	実績 (R2(2020)年度)
家庭系ごみ量(1人1日あたり)※ ₁	488g	475g	505g
★ 事業系ごみ排出量※ ₂	79,186t	77,300t	71,161t
リサイクル率※ ₃	26.4%	27.1%	26.4%
ごみ総排出量(1人1日あたり)※ ₅	1,006g	987g	990g

※₁ 家庭系ごみ量:「燃やすごみ」「燃やさないごみ」「粗大ごみ」「家庭系直接搬入量(有料分)」の合計

※₂ 側溝汚泥・ボランティア清掃などで排出される公共ごみ、資源化される食品残さを除く

※₃ リサイクル率=資源化量/総排出量(環境省一般廃棄物処理事業実態調査より)

※₄ 資源化又は再利用されるものを除き、最終的に埋立処分される廃棄物の量

※₅ 全てのごみの合計÷人口÷年間日数

主な評価と課題

- ・家庭系ごみ量の削減に向け、広報活動や生ごみ減量事業等を展開したが、目標達成には至らなかった。令和元(2019)～2(2020)年度は、新型コロナウイルス感染症の影響による市民の在宅時間の増加も要因のひとつと考えられる。
- ・「リデュース・リユースの推進によるごみの減量」、「さらなる資源循環の推進」、わかりやすい情報発信や若年層への意識啓発など、市民の意識醸成の取り組みを進める。
- ・事業系ごみについては、事業系廃棄物処理ガイドラインの周知が、排出量の削減につながった。ガイドラインの周知と大規模事業所への訪問指導を実施し、適正排出と排出量削減につなげる。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響による市民の在宅時間の増加と事業活動の制限も要因のひとつと考えられ、総じてごみ総排出量は減少した。

Ⅲ 生物多様性の保全

8年後(令和4(2022)年度)のまちの姿

まちを包み込むように広がる田園を含んだ多様な自然環境が保全され、在来の動植物が保護されるとともに、その象徴として、日本一の越冬数を誇るハクチョウと共存する自然豊かなまち

- ▶豊かな自然環境と都市の調和が図られ、在来の動植物が共存しています。
- ▶里潟、里山の保全が引き続き図られているとともに、生物多様性に配慮した農地整備など、環境負荷の軽減に配慮した環境保全型農業が広がっています。
- ▶市民が本市の豊かな自然環境を誇りに思い、農業や生物多様性の大切さを認識しています。

【平成27(2015)～令和4(2022)年度の評価指標】

指標項目	計画策定時点 (H25(2013)年度)	目標 (R4(2022)年度)	実績 (R2(2020)年度)
★ 生物多様性の象徴としてのハクチョウとの共存	日本一の越冬数	現状を維持	現状を維持
特定外来生物※ ₁ の種類	10種	現状より減少	14種
環境保全型農業を実施する農地の割合※ ₂	34.4%	50%	25.27%

※₁ 日本在来の生物の生活をおびやかす外来生物を国が定めたもの

※₂ 主食用水稻作付面積に占める化学合成農薬・化学合成肥料を5割以上削減した栽培面積の割合

主な評価と課題

- ・水辺環境、田園環境の保全と豊かな自然環境の維持により、ハクチョウの越冬数日本一を継続。
- ・市の鳥「ハクチョウ」をシンボルとして、豊かな水辺環境の保全と、農業や生物多様性の重要性を啓発するとともに、潟の情報発信や担い手の育成を推進する。
- ・従来記録になかった特定外来生物種が市外及び県外等から本市に侵入しており、今後も確認種数が増加すると見込まれるため、特に希少動植物等が多くみられる自然環境の豊かな地域において、侵入や分布拡大を防ぐ対策が重要。

IV 快適な生活環境の創造

8年後(令和4(2022)年度)のまちの姿

きれいでおいしい空気や水に包まれ、手入れの行き届いた花と緑にあふれた、市内外の人にとって魅力的なまち

- ▶ごみがなく、きれいな水環境や快適な空気が保たれています。
- ▶花や緑があふれ、きれいなまちになっています。
- ▶歩いて楽しい魅力的なまちなみになっています。

【平成27(2015)～令和4(2022)年度の評価指標】

指標項目	計画策定時点 (H25(2013)年度)	目標 (R4(2022)年度)	実績 (R2(2020)年度)
★ 生活環境における空気のきれいさ※ ₁ 沿道における空気のきれいさ※ ₂	0.007ppm 0.009ppm	現状より低減	0.005ppm 0.007ppm
水がよりきれいなランク※ ₃ になった河川・湖沼の 水域数	-	3地点	0地点
食育・花育センターが実施する花育体験プログラム 等の実施団体数	30団体	70団体	51団体
保育所、幼稚園、小学校の地域との連携による 花育活動実施率	48%	60%	47%
植栽やビオトープづくり等、美しい農村景観の形成 を行う農地の割合※ ₄	78%※ ₅	90%	85.3%

※₁ 一般環境大気測定局における二酸化窒素濃度

※₂ 自動車排ガス測定局における二酸化窒素濃度

※₃ 河川・湖沼の類型(AA、A、B、C、D、E)に相当するようなきれいさとし、項目としてBOD75%値/COD75%値で評価

※₄ 農地、水路、農道等の質的向上を図る共同活動を支援する「資源向上支払交付金」の対象農地の割合

※₅ 平成26(2014)年度数値

主な評価と課題

- ・空気のきれいさについては、自動車排出ガス規制や次世代車両の普及、大規模工場からのばい煙排出濃度の改善等により、目標を達成。実績値は十分に低い濃度で推移しており、これまでの取り組みを継続すれば現状維持のままと見込まれる。
- ・水のきれいさについて、令和2(2020)年度は、ランクアップ2地点、ランクダウン2地点となり、全体で0地点。工場・事業場の排水規制、下水道整備及び合併浄化槽の普及促進による生活排水対策等により改善傾向であるが、ランクアップには今しばらく時間を要すると思われる。
- ・花育体験プログラムが目標未達成となった要因として、新型コロナウイルス感染症の影響があった。2021(R3)年度も同様の影響が懸念される。